



開催中

第12回寄贈品展「知ってほしい 戦争の時代」

12月3日(火)～2025年2月22日(土) (冬期休館を除く)

ピースあいちの開館以来、市民の皆さまから戦争と平和にかかわる資料のご寄贈をいただいています。これまでの寄贈資料は、約4,100点となりました。今回は、新たに30名の寄贈者の方々から寄せられた143点の資料を展示公開しています。是非、会場で戦争の時代の実物資料をご覧いただきたいと思います。

会場には、日章旗寄せ書きをはじめ、大きな軍用カバンや将校用行李、水筒や双眼鏡、軍隊手帳などが展示されています。軍服や防寒コートの袖口や首まわりは擦り切れ、手縫いの補修が数箇所みられ使い込まれたものです。これらの資料から、軍隊生活の様子を知ることができます。

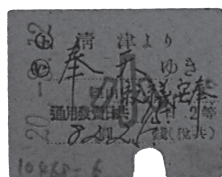
衣料切符、配給証明書、味噌、醤油、砂糖、マッチなどの家庭用回数購入券、児童用菓子回数購入券などは、戦時下の市民の暮らしを知る手がかりとなります。割引国庫債券は、軍艦や戦車の絵柄が印刷され、浴衣地の包装紙には当時の世相を表す千人針を縫う女性が描かれています。また、1945(昭和20)年8月12、14、15日の日付が入った満州(現・中国東北部)と朝鮮で使われた貴重な切符も寄贈されました。

1月25日開催の「寄贈品展トークイベント」では、切符、蓄音機、衣料切符の解説と蓄音機の実演を予定しています。本展が、戦争の時代を知り、平和な未来を考える機会となることを願っています。

▶蓄音機 1936(昭和11)年の発売。現在でもレコードが聴ける



▲陸軍将校用水筒



▲鉄道切符 満州(現・中国東北部)、朝鮮で使用された切符



▲衣料切符

ピースあいち 来館者10万人突破！

開館17年目の2024年10月19日、10万人目の来館者を迎えることができました。千種区にお住いの鈴木理恵さんとエドモンド・チャンさんご夫妻です。「展示資料が充実していて、中には胸が張り裂けるようなものがありますが…。次に伝えていく大切なことだと思います」「展示の英語版はよくわかりました。私のような外国人がたくさん来てくれるといいですね」と話してくださいました。

宮原館長は「年平均5800人ずつの方をお迎えしたことになります。コロナの時は減った来館者もここ2、3年増えてきています。来年は戦後80年。ピースあいちの役割がますます大きくなってきているように思います。」と挨拶し、銅板の千羽鶴などをプレゼントしました。



予告 2025名古屋空襲展

「80年前、父は名古屋を焼き尽くした—B29の搭乗員の記録から」

2025年3月11日(火)～4月26日(土)

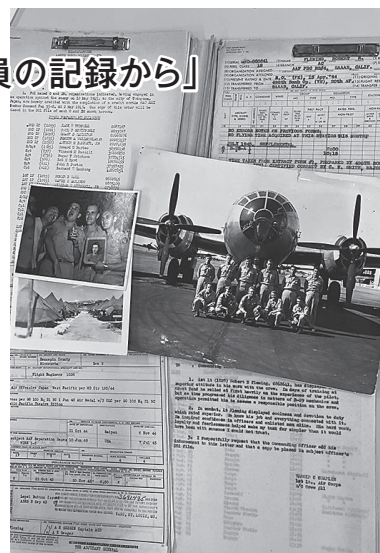
ボブ・フレミングさん(米国バッファロー市在住)が自作の映画と自分の父の軍事任務証明書を持って、5月にピースあいちを訪問されました。

その任務証明書は、1944年11月27日から翌年5月16日までB29に飛行エンジニア(第73航空団・サイパン)として乗務した記録でした。それによると、ボブさんの父親は名古屋を8回攻撃、3月11日も5月14日も含まれます。

2025年空襲展では、ピースあいち

の研究資料、証言そして彼の父の飛行記録をもとに、地上と空の二つの視点で戦争がもたらすものの実態を見ていきます。

遺品と米国立公文書館からの資料を駆使し、ボブさんは映画を作りました。父が戦争に関わったことをどう考えているのか、父と弁護士の2役を演じ、詰問していきます。その映画もご期待ください！



展示中 「核兵器の終わりの始まり」(2021年制作)

開催中～12月12日(木) 2階プチギャラリー

2024年ノーベル平和賞が日本原水爆被害者団体協議会に授与されました。核兵器のない世界を実現するための努力と、核兵器が二度と使用されてはならないことを証言によ

て示してきた活動が受賞理由となっています。これを機に、核兵器の開発、核軍縮のあゆみなど、ピースあいちが核兵器についてまとめたパネルをご覧ください。



予告 名古屋市立瑞穂ヶ丘中学校3年生の平和新聞

12月14日(土)～2025年2月末(予定) 2階プチギャラリー

夏休みにピースあいちを見学した生徒たちが作った平和新聞。名古屋空襲、原爆、戦時下の物資不足など、常設展示の中からフォーカスしたテーマが工夫

してまとめられています。

《編集後記》からは、その一枚を作った生徒さんの姿が見えるようです。

報告 「戦争の中の子どもたち」・「戦争と動物たち」展

2024年10月1日(火)～11月23日(土)

秋に来館する子どもたちに焦点を当てた企画展。今、ウクライナやガザで起きている戦争では多くの子どもたちが犠牲になっています。日本でも80年前には同じようなことが起こっていました。パネル展示で戦時下の子ども

たちの様子をじっくりと見ていただけたと思っています。

2階の映像コーナーでは国民学校の教育、疎開先での地震などについて体験者のお話を視聴でき、好評でした。



●アンケートから

- ・人、動物を傷つけるだけの戦争を二度とくり返さないで。(13歳)
- ・自分たちがあたりまえのように学校へいき、せいかつをしていることがあたりまえではないということをあらためておもった。(14歳)
- ・子どもたちを戦場へ送らなくていい世界をつくり、平和をあきらめない世界へ。(14歳)
- ・たくさんの貴重な資料や写真を見ることができ、よい体験になりました。子どもたちや動物たちまでが犠牲になる戦争は絶対にくり返してはいけないと心に強く思いました。(48歳)

◆子ども展関連企画「秋の朗読会」

10月26日 1階交流のひろば

ピースあいち朗読の会「オーブ」による朗読会。「悲しい対馬丸の話」「一つの花」など7人の演者がそれぞれ選んだ絵本から朗読しました。

文字だけでは通り過ぎる言葉も、情景が浮かび想いが伝わる、一つひとつの言葉がこころに残る、そんな朗読会でした。

せんそうは 悪魔／すべての ものを こわしくす
／ここのこえから はじまるあさを／かあさんがつくる
あさのしよくじを／うばわないで！こどもたちから…

報告 2024年夏の特別展「マンガと戦争展」 2024年7月23日(火)～9月14日(土)



今年の夏企画『マンガと戦争展』は、一か月半の会期中、1500人を超える来場者で連日にぎわいました。若い人たちの姿も多く見られ、マンガという媒体の魅力と裾野の広さを改めて感じさせました。

今回の展示は、戦後70年だった2015年に、京都国際マンガミュージアムで企画・展示されたものをベースに、ピースあいち独自の内容を加えて構成しました。

ピースあいちで行うにあたっては、「原爆」「特攻」「満州」「沖縄」の4つのテーマを選び、各テーマの基本的な解説パネルを新たに追加し、作品の紹介場面の理解を助ける手元資料を作成しました。また、貴重な古いマンガ雑誌などの実物資料も多数展示しました。さらに、第2部「2つの物語」コーナーでは、地元ゆかりのあるおざわゆきさんの「あとかたの街」と、汐見夏衛さん原作の「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」を詳しく紹介しました。

開幕最初の週末である7月28日には、『マンガが語る

戦争～戦後80年・その先へ』と題して、京都精華大学国際マンガ研究センター特任准教授のイトウユウ氏をお招きしたトークイベントを開催しました。京都の展示の企画者でもあるイトウ氏は、豊富な知識で戦争マンガの歴史を解説し、マンガが写し出す時代の空気、日本社会の戦争への向き合い方の変遷など、とても興味深いお話をしてくださいました。

「様々な作品が混在する中で、戦争とはどういうものかを、結論ありきではなく読者が考えればよい。時代の変化とともに、年齢やジェンダーの枠を超えた作品が増えてきたのは良いこと。」などと語られ、満場の参加者は興味深そうに聴き入っていました。

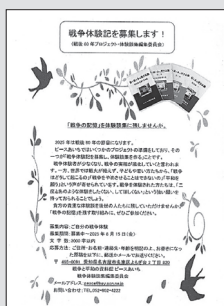
限られたスペースで展示をどう構成するか、ピースあいちのオリジナリティをどう出すか。数多い作品毎の版權処理も時間がかかります。何度も会議を重ねて形にしてゆく作業は苦労もありましたが、多くの来館者から好意的な感想をいただけて、企画して良かったと思いました。



**戦後80年に向けて、
8つのプロジェクトを進めています。**

テーマは、「戦後80年 平和な未来のために今知る 考える 動く 伝える」。ボランティアがそれぞれやりたいことを提案し、自分もやってみたいという人たちとチームを作って取り組んでいます。初めての試みもあり、どうなることでしょう。お楽しみに！

- ロールプレイで考えよう～この国に戦争が起こるとしたら～
- ワークショップ「差別と偏見、争いのない世界へ」
- 「来館者のメッセージ」で平和の樹(作品)づくり
- 戦争体験の語り動画のアーカイブ化
- 夏企画1.「学び舎から戦場へ」
- 夏企画2.「ピースあいち戦争体験の語り事業の歩みとこれから」
- 戦争体験の募集・体験集の作成
- 常設展第4展示「現代の戦争と平和」追加



館内で40人以上の戦争体験の語りの動画を視聴していただけます。

今まで戦争体験を語っていただいた方たちの動画約100本を、多くの方に観ていただき活用していただけるよう、順次作業を進めています。今は40人以上のお話を館内で視聴していただけます。また2階の映像コーナー、子どもたちの読書コーナーも充実してきました。ぜひ一度、ご覧ください。

お知らせ 名古屋二期会アンサンブル研究会によるピースクリスマスコンサート

▶12月22日(日)14:00～(13:30開場) ▶1階交流のひろば ▶参加費無料・定員40名
▶要予約 TEL 052-602-4222

コンサートのみの開館です。日本の歌、世界の歌、クリスマスソングなど、みなさんご存知の歌や本格オペラを楽しめるステージです。

報告

夏の
戦争体験語り
シリーズ
2024

8月1日(木)から15日(木)まで計11回開催されました。連日の猛暑にもかかわらず毎回満席の中、ピースあいちの語り手、語り継ぎ手の方たちが、日替わりでお話しました。6日、9日、15日にはオンライン配信も行いました。7、8月は「愛知・名古屋戦争に関する資料館 戦争体験を聴く会」など、各地の催しに語り手・語り継ぎ手が参加し、お話しました。

8月1日(木)「空襲下での暮らし、戦後の暮らし」

お話 井戸早苗さん
(85歳)



空襲のときは、火災から町内を守るために防災隊として残る両親と離れ一人で逃げた。まだ6歳でした。「防毒面」と呼ばれるマスクと「鉄かぶと」と、「お米さえあれば大人は絶対助けてくれるから」と両親に言われ、米を背負って逃げた。空襲警報が鳴る中、寒く、暗い夜道を「なぜいっしょに逃げてくれないの」と思いながら防空壕に向かった。いま、ウクライナやガザの報道をみて、自分が生きている間にまたこんな事態が起こると思わなかった。(林記)

8月2日(金)「学徒勤労動員体験」

お話 望月菊枝さん
(94歳)



1944年、女学校2年生の2学期から軍需工場への勤労動員が始まった。空襲が激しくなり、作業は学校で行われ校庭には防空壕が作られた。翌年1月23日午後、警戒警報で壕に入るとすぐに爆音が鳴り響いた。壕を出ると、今まで見たことのない光景が広がっていた。5～6mの大きな穴ができ、土の中から血まみれの体の一部が見えていた。42人の生徒が犠牲になった。戦争は武器による戦いだけでなく、普通の日常が突然壊されるということ。朝、笑顔で「行きます」と家を出た娘の「ただいま」がない。本当に理不尽なことです。(村林記)

8月3日(土)「トラック島に眠る志願兵17歳」

お話 小澤美由紀さん
(語り継ぎ手の会)



大祖父である等さんは、16歳で海軍に入り、17歳という若さで、トラック島で亡くなった。等さんが乗っていた戦艦が沈んでいくお話では、恐ろしい戦争の様子を鮮明に想像することができた。「望まない別れはあってはならない」という小澤さん。これはいつの時代でも起こってはならず、しかし今でも世界中で起こっていると話された。いつか我が家に等さんの遺骨が戻ってきてほしいと願う小澤さんからは、亡くなってしまっても、一度も会ったことがなくても、存在する家族の絆を感じた。(清水記)

8月6日(火)「私のヒロシマ」

お話 佐々木陽子さん
(語り継ぎ手の会)



母方の祖母は、日記を家の戸棚に仕舞ったまま、戦後もずっと語ることをしなかった。日記には、原爆症になった夫(祖父)を看取るまでの5日間の詳細な記録があった。その中には原爆が「広島大空襲」と表現されており、原爆であったことも知らず、ただただ必死に看病していた様子が伝わってくる。佐々木さんは、「人の数だけ戦争体験はある」という。佐々木さんがご家族のことに思いを寄せ、丁寧に調べ、語り継ぎをしてくださることで、私たちも、その心の奥の思いの一端に触れることができた。(高野記)

8月7日(水)「北朝鮮からの引揚体験」

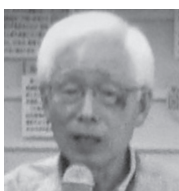
お話 富田祥子さん
(82歳)



昭和17年、現在の北朝鮮の茂山^{ムンサン}で生まれた。3歳の時に終戦を迎え、10か月かけて日本に帰還した。父は戦地に出征しており、母と1歳半の妹と祖母での逃避行となった。昼は山の中で過ごし、夕方に火を焚いて夕食と野宿。足手まといになると子どもを川で溺れさせる人、食糧やお金に交換する人もいた。子ども一人150円。逃避行の最中、寒さ、飢餓、栄養失調、発疹チフスで毎日多くの死者が出たが、そのまま捨てられていった。1946年6月、安山^{アンサン}から日本に帰る船で帰還した。4歳の時でした。(瀧記)

8月8日(木)「名古屋空襲体験・戦中・戦後の生活」

お話 森下規矩夫さん
(86歳)



現在のバンテリンドームナゴヤ付近で生まれ育った。小学生の頃名古屋空襲に遭い、親戚の住んでいる三重県の鈴鹿市に疎開した。名古屋で空襲に遭った当時は、神社の近くの森にある防空壕に避難したものの、何が起きているか分からず、とにかく早く終わることを願った。空襲が終わると建物と共に人が消えた。警報で眠れない日々だった。疎開先では、空襲はないものの、生活環境が大きく変わり、苦しい生活が続いた。そこで終戦を迎える。当時は思ったことを言えない無言の圧力があつた。(北川記)

8月9日(金)「叔父・伯母の長崎原爆」

お話 大山妙子さん
(語り継ぎ手の会)



中学の時に原爆に関心を持ち始め、父から叔父(当時17歳)と伯母(当時24歳)の原爆体験を聞いた。叔父は陸軍特別幹部候補生として入学を志願したが不合格となり、兵器工場で働いていた。そこに原子爆弾が落とされてしまった。伯母は平戸に嫁いでいたため、長崎に原爆が落とされたことを後から知った。長崎の家族と会った後、平戸に食料などを取りに帰ったが、その間に弟妹が死んだことを聞かされた。原爆で8人、病気で2人、計10人の家族が1年のうちに亡くなってしまった。(大矢記)

8月10日(土)「母の戦時下の青春」

お話 中川弘美さん
(語り継ぎ手の会)



母は青春時代を戦争の中で過ごした。通っていた吹上尋常小学校は、途中で国民学校に名前が変わり、「慰問(傷病兵の見舞いなど)」をしていた。1943年、女学校に入学したが満足に勉強できず、学徒動員で農園や工場での労働や徴兵事務の手伝いなどを強いられた。そんな中でも、お気に入りの本や色紙を集めていて、現代の女の子と変わらない心を持っていた。1945年3月の空襲で女学校は燃えてしまった。そして母は、終戦を迎えたときのことを、「やっとゆっくり寝られると思った」と振り返っている。(大矢記)

8月13日(火)「岐阜県での学童疎開体験」

お話 木下信三さん
(89歳)



日本本土への空襲が激しさを増した1945年3月末、国民学校5年生の時、2歳年下の妹、美智子さんとともに、岐阜県福岡村へ集団疎開をした。豆かす(大豆を絞ったもの)、かぼちゃの干したもの、野草などが入った雑炊ばかり。とにかく食糧事情が悪かった。もともと体が丈夫ではなかった妹は、栄養失調になり、何日も下痢が続くという状態だった。まもなく父が名古屋へ連れて帰ったが、戦後も体力が回復することではなく、中学卒業後に亡くなりました。私たち兄弟が学童疎開へと旅立ったのと同じ、3月31日のことでした。(近藤記)

8月14日(水)「在満少国民の体験」

お話 松下哲子さん
(90歳)



昭和9年に満州で生まれ、敗戦の翌年の昭和21年8月の引き揚げまでを過ごした。満州では空襲に遭うことや、ひもじい思いをすることはなく、恵まれた生活を送っていた。冬に学校の外で、スケートをして楽しかったことを覚えている。しかし、昭和19年頃に戦況が悪化し、授業のない日が多くなり、郊外に行つて飛行機の燃料のためのヒマの種を撒き続けた。終戦の8月15日、玉音放送を直接は聞かなかったが、周囲の人が泣いていたことや植民地支配が終わって朝鮮人が楽しそうにしているのを見て、長い戦争が終わったことを実感した。(上野記)

8月15日(木)「学童集団疎開」

お話 八神邦子さん
(89歳)



昭和19年8月、御園国民学校3年生(9歳)の時、先生引率のもと三重県伊勢市に学童集団疎開した。すぐに一身田のお寺に移った。100人の児童に教師2人、寮母2人。細かいところまでは手が届きません。さびしい(親に会えない)、ひもじい(イナゴやカエル、ヘビまで食べた)、かゆい(ノミとシラミ)生活。1年3か月ぶりに名古屋へ帰り、焼土と化した姿をみた時、多くの人々が家をなくし生死不明となったことを知った。浮浪児、戦災孤児といわれた引き取り手のない学童たちをみた時はたいへんショックだった。(巽記)

報告 ピースあいちの語り事業

「来館」と「派遣」どちらも徐々に人数が回復しています！

夏の語り事業はピースあいちへの来館者と、県・市資料館への来館者対象のものがああります。これらの語り事業には語り手、語り継ぎ手の方たちにご協力をいただいています。参加者は、十代の小中生と60歳以上の方が多いですが、コロナ禍以降、徐々に全体の人数が増えています。秋以降についても、来館者も派遣件数共に増えてきています。

語り手、語り継ぎ手の方たちは話す機会ごとに、話の内容や、対象者にあわせて工夫をこらしておられ、そのたゆまぬ研鑽とご努力に心動かされます。

夏休みを活用してピースあいちでボランティア&実習

1年のうちでもっとも来館者の多い夏。今年は、例年来てくださる名古屋市立大学(6月23日～9月14日計10回)から6人、今回初めて聖霊高校から(8月1日～3日)3人、中国からの留学生1人、そして博物館実習には(7月20日～9月3日10回)4人の参加がありました。

受付、イベント会場設営、資料の準備、戦争体験者のお話を聞く、企画展の設営や撤収など、ピースあいちのボランティアが日々行っている様々な業務を一緒に進めてくれました。



博物館実習

「あいち平和のための戦争展」

8月15日(木)～18日(日)

戦争展全体のメイン企画「名古屋空襲」のブースに名古屋空襲研究会と共同して参加しました。ピースあいちは、今年3月に展示した「名古屋空襲を知る」パネルの中から16枚を展示。市工芸高校が作成したジオラマ風の地図を前に、名古屋空襲研究会作成のスライド解説も好評でした。



授業の取り組みとして主体的な参加を促すため、生徒に前もって質問を準備させる学校もあります。生徒の質問の一つひとつ丁寧に答える語り手さん。最後には「私からどうしても伝えたいことがあるんだよ。人間は何

のために生まれたか、そして何をなすべきか、考えてほしい」と、十代の生徒さんたちだからこそ伝えたいことを率直に話す語り手さんの姿が印象に残りました。

話の後の質問タイムでそれまでの講話で語り残したことを補うかのように、生き生きと話す語り手さんの姿もありました。「戦争中で一番怖かったのは何ですか」という質問に、空襲後避難壕から出てきたときに見た光景のすさまじさを語る語り手さん。「一人ぼっちになったらどうしようと本当に心細かった」と付け加えていました。

制限時間や対象者のことを考えて、導入部分やパワーポイントを駆使して話を工夫する語り継手さんもあり、これからの語り事業の発展が期待されます。



展示ガイド



語り継ぎ

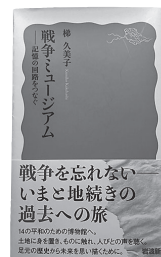
おすすめ本

『戦争ミュージアム—記憶の回路をつなぐ』

(著者:梯久美子 出版:岩波新書 2024年)

紹介されているのは、「長崎被爆資料館」「戦没画学生慰霊美術館無言館」「象山地下壕(松代大本営地下壕)」「舞鶴引揚記念館」など14館。近くでは「満蒙開拓平和記念館」。長野県阿智村にあり、満州での開拓民の生活が加害と被害の

両面から展示されています。残念ながら『ピースあいち』は紹介されていませんが、この本を片手に資料館巡りをしてみるのも勉強になるでしょう。ちなみにピースあいちは、『誰も戦争を教えてくれなかった』(古市憲寿/講談社/2013年)でこう紹介されています。「多くのスタッフが常駐していて、コミュニティとして機能している。アットホームな雰囲気である。」(N.T)



シリーズ 平和を守る仲間たち② 愛知県原水爆被災者の会(愛友会)

“被団協に2024年ノーベル平和賞”に驚愕の喜び!をならす

10月9日～11日の全国都道府県代表者会議に出席し帰名の新幹線ホームで、「被団協ノーベル平和賞受賞!」の知らせを受けました。俄かに信じがたく、「本当か!デマか!!」と心が躍り、車内で悶々。スマホを持たない私は勇気を出して隣の男性にスマホで確かめてもらい、やっとの事で受賞を信じました。この会議では、原爆被害者の基本要求について学びあうということで、原爆投下から日本被団協結成、原爆医療法制定による被爆者健康手帳交付までの歴史や国家賠償に基づく被爆者援護法を求める運動と核兵器廃絶運動を振り返りました。私もパネラーの一人として参加しました。その帰り道での受賞の知らせ。喜びを大声で叫び誰かに伝えたい気持ち。スマホ男性にお礼方々20分ぐらいお話ししました。

1956年の調査で愛知県内の被爆者890人が確認され、翌1957年2月、愛知県原水爆被災者の会(愛友会)が結成されました。以降、①世界のどこにも被爆者をつくらない、戦争・核兵器廃絶 ②被爆者(死者・生存者)への国家補償 を求めて、活動を続けています。



10月27日には休止状況となっていた瀬戸支部が再開され、10月30日からは今年も愛知県下のすべての自治体(県と54市町村)を被爆者が訪問し、非核平和行政と被爆者援護施策の推進を求める被爆者行脚の行動がスタートしました。また、来年9月27日には、名古屋市公会堂で「戦後・被爆80年 あいち平和のつどい」を2000人規模で開催することを計画しています。

賞を力に変えて被爆者の2大要求を実現していきます。

金本 弘(愛友会理事長)

ボランティアの窓

寄贈品展の準備で 思うこと、母のこと

寺島 雅恵



ボランティアになって3年になります。お当番、資料班、夏の戦争体験を聴く、寄贈品展、研究会の講演会、朗読会など、いろいろ参加させていただいています。

寄贈品展にあたっては、寄贈品の来歴をお聞きします。今年、私が担当した方からは、「寄贈品の持ち主は優秀な方だったが、満蒙開拓青少年義勇軍に入隊し、激しい軍務と栄養失調で、15歳で亡くなった」とお聞きしました。食べたいものを食べ、安心して眠れる場所がある私たちはなんて幸せでしょうか。近年では寄贈者もお子さんからお孫さんへと移り、寄贈品の情報が分からないことも多くあります。

私自身も母が名古屋で空襲にあい何度も焼け出され、「火事は何もかも無くなるからいやだ」と言っていたのを思い出します。もっと話を聞いておけば良かったと今は思いますが、母は話したくなかったかもしれません。

昔々のお話です。

吉田 稔



思い起こせば20年前の話になりますが、その当時はまだ現役で「ミツカンの水の文化センター」で再雇用で働いていました。

新聞記事で見た戦争資料館に関わる仕事をしたいと考えていました。実は、もう一つボランティア活動に関わっていました。平和憲法と言われた日本国憲法を守る活動です。日本が中国、朝鮮等東アジアの皆さんに多大な被害を与えました。その反省に立って平和憲法の日本国憲法ができました。その一方で自分なりに考えていたのは、戦争の資料等を所蔵する戦争資料館作りたいと思いでした。加害と市民の被害を客観的に伝える戦争資料館でした。

この二つの活動をしっかりやるのが、僕の使命と考えて会社に退職届を出しました

資料館探訪 39

ノーベル賞博物館 —スウェーデン・ストックホルム—

スウェーデンの首都ストックホルム、「古い街」を意味するガムラスタンの中央に、受賞者たちを顕彰する「ノーベル賞博物館」がある。

ストールトルゲット広場に面して建つ博物館に入ると、歴代受賞者のパネルが展示してある。中間子理論で日本人初の受賞者となった物理学賞の湯川秀樹博士、二人目の朝永振一郎博士、化学賞の福井謙一博士、野依良治博士、日本人で初めて生理学・医学賞を受賞した利根川進博士、文学賞の大江健三郎氏など、日本人のパネルを探すのも楽しい。また受賞者は、自身の研究にゆかりのある記念品を寄贈することが恒例となっている。素粒子理論研究

で物理学賞を受賞した益川敏英博士(名古屋大学)は高校時代に使っていた計算尺を、またiPS細胞研究で日本人二人目の生理学・医学賞を受賞した山中伸弥博士(京都大学)は電気泳動槽とマイクロピペットを寄贈していた。これら以外にも多くの寄贈品が並んでおり、思わず見入って時が経つのを忘れてしまう。

2024年のノーベル平和賞は、被爆者の立場から核兵器廃絶を訴えてきた日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)が受賞した。ノーベル平和賞だけはノルウェー・オスロ市庁舎で授賞式が行われる。市庁舎近くのノーベル平和センターには受賞者の写真も飾られている。授賞式

ではメダルが授与された後、受賞者がスピーチをする。被団協のスピーチが待ち遠しい。(Y.N.)



ノーベル賞博物館



オスロ市庁舎ホールと平和賞受賞者



月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

新会員を大募集中!! 知人・友人にもお伝えください。

「ピースあいち」は、民営でボランティア運営でも、光熱費・固定資産税等で施設維持に年1200万円がかかります。他方で収入は、展示会などで来館された方の入館料(大人300円、こども100円)は、年100万円にとどきません。多額のご寄付や助成金がとても大きな助けになっていますが、毎年予定できるものではありません。最も頼りになるのは、会員の皆様からいただく年会費収入です。正会員6000円、賛助会員3000円です。いま、正会員が約330人、賛助会員は約400人。もっともっと増やしたいのです。

「ピースあいち」の活動に共鳴していただける方なら、どんなでも大歓迎です。電話・Fax 052-602-4222にご一報ください。クレジットカード、銀行振込で入会、寄付していただけます。



オンラインの入会はこちら

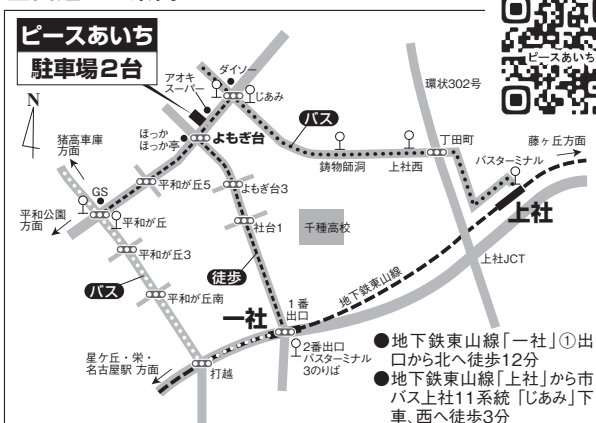


オンラインの寄付はこちら

【利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日
年末年始休館
12月26日(木)～1月6日(月)
- 入館料 大人300円・小中高生100円
- 常設展示「愛知県下の空襲」「戦争の全体像・15年戦争」「戦時下の暮らし」「現代の戦争と平和」、準常設展示「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」。ほかに、図書や戦争体験動画のライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

交通のご案内



●編集後記●

今年のノーベル平和賞は日本原水爆被害者団体協議会が受賞した。発表の日、テレビ生中継画面には、被団協の幹部が自分の頬をそとつねっている様子が映っていた。このごろはやりのフェイクニュースと思ったのかもしれない。そんなことはない。選考委員会は被団協の真面目な活動ぶりをちゃんとみていた▼しかし、地球上の核兵器の現状は人類にとって甘くはない。いくつかの国は自国が持つ核爆弾、核施設に言及し、平和への脅しに使っている。平和は依然「日暮れて道遠し」なのだ。どうしたらいいのだろう▼結局、地球上の一人一人が、お互いを理解できる世の中にするしかない。そのためには「ピースあいち」のような、同じ志を持った人たちの存在こそが一番有効なのかもしれない。(S.K.)